

このまま衰退しますか？ もう一度復活しますか？

佐藤 寛美¹・中山 理恵²・山下祐一郎³・都田 康介⁴

¹菊池市役所 市長公室 主任主事

²菊池市役所 生涯学習課泗水公民館 係長

³菊池市役所 商工観光課 主事

⁴菊池市役所 環境課 主事

菊池市の中心市街地は空き店舗が増加し、買い物客も減少傾向。まちづくりのコンセプトが不明確で、人が市街地から流れ、居住者の高齢化も進行し、賑わいが薄れています。昔から住んでいる人は、旧菊池市が繁栄していた過去の栄光を忘れられず、かといって現状では自分達が住むにはあまり困っていません。そんな「自分達はこのままでいいや」という意識を変えなければ、まちは衰退していくばかりです。そこで商業エリアと住宅エリアに分け、3つの政策を展開します。1つ目は空き店舗や空き家を活用して起業希望者や長期滞在者を受け入れ、まちなかに新しい風を吹き込みます。2つ目は地域のコミュニティづくりを目的とした住民がつどえる場所づくり。3つ目は歩く人に優しいまちづくり。住んでいる人に大きな負担をかけず、けれど将来住む人達にも負担にならない。まずは昔からの住民の意識を変え、活気を取り戻すことを提案します。

1. 政策提言の背景

菊池市の中心市街地といわれる隈府一帯は、菊池一族により整備されたまちで、昔は県北有数の文化経済拠点都市でした。市街地から歩いていける範囲には、菊池温泉や菊池神社など、観光地としても魅力あるものが多数点在。菊池溪谷への道は、中心市街地につながっており、多くの人が行きかう場所です。

しかし、近年は商店街の空き店舗が目立つようになり、住民からは「シャッター通り」といわれる始末。菊池溪谷へ向かう観光客も、素通りするだけの通過点となってしまいました。通りを歩く人が少なくなり、まち全体の賑わいが薄れていきました。通りの賑わいがなくなり、空き店舗が目立つようになった状況では、そこで買い物しようという人も減ります。中心市街地の中に住む人でさえ、車で離れたスーパーなどに買い物に行きます。商店街とは名ばかりで、そこでは必要なものが手に入らなくなっているからです。住む人達の高齢化も進み、人口減少が止まりません。御所通りにある県立菊池高等学校については、少子化の影響や市外の学校へ魅力を感じるなど、

進学を希望する子どもが減少。生徒数は減っていくばかりです。

それではもう菊池市には魅力がないのかといえば、そんなことはありません。上記のとおり中心市街地と観光地が近く、宿泊客が歩いて回るにはちょうどいい距離に位置しています。菊池溪谷は年間20万人を超える人が訪れる人気の場所で、その人達が中心市街地で買い物するだけでも大きな経済効果が見込めます。対外的なものだけではなくありません。小中高校と揃っているだけでなく、病院など生活に密着した施設も多く点在しています。他の地域と比較しても、コンパクトシティ構想に沿ったまちづくりが可能な地域であるといえます。

2. 政策提言によって解決したい課題

昔から住んでいる人は、旧菊池市が繁栄していた過去の栄光を忘れることができず、歴史・文化を語るだけで、目の前で廃れていくまちをどうにかしなければという意識が薄いです。現状のままでも、住んでいる自分達は困っていないのが理由の一つと考えられます。実際、平成30年に実施された空き家・空き店舗調査では、76軒ある空き家・空き店舗の中で「貸す意思のある物件」はたった5軒だけでした。店を開けなくても生活ができる。店舗兼住宅のため、そもそも人に貸したくない。さらに、よそ者を受け入れたがらない風潮があります。それに加えて、「自分達がどにかしなければまちは衰退する」という危機感のような意識がないのです。「このままでいいや」という意識、「行政がどうにかしてくれるだろう」という自分達では動かない現状を変えなければ、まちはこのまま衰退していくだけです。

3. 課題解決の特徴、重要性、有効性

課題解決のために、いくつかの通りがあり、商店街が分かれている中心市街地を「商業エリア」と「住宅エリア」の大きく2つに分けます。立町通りを中心とした商業エリアは、商店街としての機能を残し、観光客の誘致などにつなげます。立町通りを挟むように住宅エリアを設け、住みやすいまちづくりを進めます。そのための政策として次の3つを提案します。

(1) 外と内をつなぐ

空き家・空き店舗を活用して、中心市街地の外から人を呼び、内に住む人達とのつながりを作っていきます。外の人が入ることで、新しい考えや意識、行動を体感させ、住民の意識が変わっていくよう促すのです。

まず空き店舗を活用して、新規起業家のためのお試し店舗をつくります。販売や飲食店など、新しく開業するには土地も施設も費用がかかります。新しいことに挑戦したいけれど初期費用が負担になっている人を受け入れ、一定期間店舗として提供し、起業支援の拠点とします。うまく顧客を捕まえることができれば、そのまま菊池市に定住し営業してくれる可能性もあります。

次に空き店舗を活用して、関係人口づくりを進めます。近年、移住した定住人口でもなく、観光に来た交流人口でもない、地域や地域の人達と多様に関わろうとする人達が増えてきました。人口減少・高齢化により地域づくりの担い手がない現状を、関係人口と呼ばれる地域外の人材を受け入れることで、その人達が地域づくりの担い手となることが期待されています。そんな人達のために、地域と関わりながら滞在できる環境を整備します。そこでは地域の人から依頼された仕事の対価として、菊池市内で使える地域通貨「めぐるん券」や「周湯券」が与えられます。地域の人達と関わりつつ、対価として得た地域通貨を使い菊池市内で買い物をすることで、得た対価を市内で循環させることが可能となるのです。

これらの運営は地域おこし協力隊を中心に行います。国の補助制度で一定の活動費用を持つ協力隊が担うことで、追加の予算を組む必要はありません。協力隊自身も3年間の活動費や生活費など一定の保証があるため、軌道に乗るまでの期間も生活面など安定しています。運営が軌道に乗り、賃借料などから利益を生むようになれば、協力隊自身の就労・定住にもつながると考えます。

(2)人と人をつなぐ

現在、中心市街地の中には休憩する場所がありません。例えば近所の人が集まってお茶を飲むというような場所さえないので。そこでフリースペースを設け、住民に開放します。テーブルと椅子、自動販売機を設置し、それ以外は住民が自由に持ち込むようにします。特に高齢者で、普段あまり出歩かない人が歩いてこれる場所にします。散歩のついでに立ち寄り、近所の人とお茶を飲んで会話を楽しむ場所があれば、引きこもり防止や認知症予防にもつながります。住民提案型でイベントなどを開催し、自分達で居場所を作ってもらおうのです。

駄菓子屋を併設し、近所の子も達が通うようになれば、高齢者と子どもをつなぐ場所になります。顔見知りになり、気軽に挨拶できる関係が構築されることで、「知らない大人」から「近所のおじちゃん」という認識が変わります。そうすると、万が一、子どもに困ったことがあっても、周りの大人に対して「助けて」の一言が言いやすくなります。そうやってすれ違うだけだった関係が、挨拶する関係に変わり、まち全体で子ども達を見守る環境に変わるからこそ、「安心・安全なまちづくり」と言えるのではないのでしょうか。

何もしなければ、高齢者は気力も体力も落ちていく一方です。三菱総合研究所の松田智生氏は、日本版CCRC構想の中で、アクティブシニアのキーワードに「きょうよう」と「きょういく」があるとしています。「今日用＝今日用事がある」と「今日行く＝今日行く場所がある」ということです。地域の仕事や社会活動、生涯学習などの活動に積極的に参加することで、高齢者の貢献欲求と承認欲求が満たされます。誰かに貢献している、誰かに承認されているという実感は、生きるための原動力になります。それは高齢者だけに限ったことではありませんが、退職などで社会と離れてしまったと感じる高齢者こそ、貢献欲求と承認欲求が満たされにくい環境にいるのが現状です。

菊池市は「文教の里」ともいわれています。人がつどう場で、高齢者が子ども達に菊池の歴史を教える環境ができれば、住民が大事にしている菊池の歴史も衰退するこ

となく次世代へつなぐことができます。

(3)歩いてつなぐ

今の中心市街地に必要なことの一つに「歩きやすさ」があります。本来、商店街は歩いて回るものが多いですが、現在の中心市街地は決して歩きやすいとは言いがたいです。元々人通りが少ないのもあり、かなりのスピードを出して走る車が少なくありません。

そこで中心市街地をメインに宝探しを開催します。現在、菊池一族をテーマにしたスタンプラリーを開催していますが、スタンプラリーのように決められた場所をただ巡るだけではありません。「リアル宝探し」を手掛けるタカラッシュと菊池の宝探しを企画します。中心市街地には、各通りに名前がついており、直線が多いので宝の地図としても表現しやすい地形です。謎解きに使える歴史遺産も多く、謎を解きながら菊池市のことを学ぶことができます。実際に歩いて回らなければ解けない謎を作り、歩き疲れた体は温泉で癒すことができます。足湯を立ち寄りスポットに取り入れれば、必ず菊池の温泉を体験する機会をつくることができます。疲れると甘いものが欲しくなりますが、中心市街地には和菓子やケーキなど甘いものを売っているお店が多く点在しています。まさにリアル宝探しに最適な地といえます。祭りなどは1日単位の短期開催ですが、リアル宝探しは長期間開催することで、菊池市内だけでなく市外からの参加者を呼び込むことが可能です。難易度を上げることで、達成までに期間が必要となり、遠方からの参加者は旅館などで宿泊するなど、観光との組み合わせも可能性が広がります。期間中は、車の通りや速度制限を実施することで、歩行者の安全にも配慮します。車が走るだけの通りから、「人が歩くための通り」を復活させるのです。

歩くことは健康面からも重要視されています。特に、車社会である菊池市において、普段歩かない人が歩くようになれば、それだけで健康増進が見込めます。健康的な人が増えると、医療費や介護保険料などの増加を抑える効果もあります。

4. 以降 課題解決策の具体的な手法、解決策の中身、解決策を考え出す過程で行った具体的な検証の結果

これからの未来を考えた時、このままでは菊池市の中心市街地といわれる場所は確実に衰退し消滅します。中心市街地周辺は、観光・生活の両面において環境が整っています。他の地域と比較しても、大規模な都市開発の必要もないほど物は揃っているのです。しかし住民が動かない。そこで上記のような3つの政策を進め、住民の意識を変えることからまちの活性化は始まると考えます。